私の戦争体験

貝塚市　中村　マツ江　91歳

私は船場の端の生まれですが、父が軍事工場で役職に付いている関係で、西九条のほうに引越しとなりました。それから妹や弟が生まれ、おじいちゃん、おばあちゃんと続いて死んでから、戦争を経験することになります。

中学1年生の頃、私は女学校へ行きたく先生に話に行ったら、お母さんと一緒にと言われ、2人で先生のところへ行った。先生が「お父さんはどんな仕事をしているの?」と聞くので、「軍事工場で外国の人を相手にいろいろと仕事をしている」と答えると、「あなたは非国民でおれるのか」と、学徒動員に行くように言われた。

さっそく1ヶ月経ってから、私たちの学年は、学徒動員として20人集められた。他には1組50人のグループが3組、それぞれに軍事工場に送り込まれた。

私の行ったところは、公立の商業高等学校で、食堂でお昼のお食事を作った。大豆の油は兵隊さんに送るため、残ったカスが私たちの昼食になった。食べられたものではないが、他

に食べるものがなかった。

食堂のとなりの部屋から、別のグループの男の子が友達同士で節穴からのぞき、今日の当番は誰か見て、帰りに待ち伏せていじめをしてきた。「今日当番やったやろ、お昼の盛りが悪かった、減らしたんやろ」と言って叩いてくる。女の子が叩かれたらかわいそうなので、私が当番の子に付いて帰り、駅まで連れて行った。

昭和19年3月13日、大阪大空襲

王子製紙から500メートルほど離れたところから、火がついた円盤のようなものがあちこちから飛んできた。上からは焼夷弾が降ってきて、それを落とさないようにつかまえて、毛布にくるみ、防火水槽（各家庭に水を貯めていた）に入れると〝シューンッ〟と水しぶきをあげ、すぐに伏せてその様子を見ていた。

2、3日して、担任の先生が行方不明という連絡が入った。手分けして探そうとなり、私は大阪市内の木津川に逃げたんじゃないかと思い（遊郭があり、そこに逃げる女性が多くいたので）、向かった。道中には黒く焼けた人が転がっていて、つまずいた。「助けて」という声が聞こえてきて見ると、体が半分以上焼けていた。

木津川は、たくさんの遺体で黒くなっていて、その中に先生の遺体が見つかった。水で体がぶくぶくに膨張した姿を見て、思わず泣いた。先生の遺体を学校へ運ぶため、大八車に乗せようと、まわりの人と協力して乗せ、学校へ戻った。戻った頃には体から水が抜け、先生は元の姿に戻っていて、「先生の顔になったなあ」とみんなで笑い合った。「これで先生とお別れしいや」と言われ、惜しむ間もなく、それぞれまた元の持ち場へと帰っていった。